東洞吉益先生醫事或問　下

試 り
417
2 止

醫事或問巻下

一 或問曰今此名醫ら鮮人参をもて氣を補ふを以ふ志なよ氣ふ拘りそしく療治志のふすいかん

答曰元氣ハ天地根元の氣ふして人乃胎(たい)内(ない)ふやどる時ふうけ造化の司(つかさど)る所也人力というけ難(うけがた)すあるく以ろ氣虚となる時は死ぬるなりこれ長短を天ふ附ると云へし此故ふ天子諸侯よりしてしも庶人のまてよ

門 ヤ 武 9
號 417
巻 2 上

なかさなきのうりかんと草根木皮をも
氣を補助となすと得んや古語曰攻病
以毒藥養精以穀肉果菜とあるをいふまく
薬とすまて精を害ふといふすと定めん仲
景も人参ハ心下の痞鞕を治すといふてく
決の外ハ氣を補ふといふ事なし氣を
補ふといふハ疾醫絶て遂に後世の人の
說なり唐の世とてもいはぬ臆撰なりしを
孫思邈が千金方に人参を以て茯苓

とすまていつしも從ありやまなといふ色
いふも人参ハ元氣を害ふとはいはざるす
此なり非人ハ茯苓ハ元氣を補ふといえん
や然るに後世乃醫家おしなべて元氣おす
といひ或ハ氣積或ハ氣虚とあるハ氣乃
字といふハ内經よりおこりくなり其内經を
後世の偽作なく取つて古經へかなうると
より元氣ハ天地の間とところ其人の以ふべき
不なわかれ故よ聖人なそていはまへ

さはなり又人参元氣を益すといふは
唐の甄権より始まり詳に薬徴に
辨ぜる也人参は専ら心下痞鞕よ
朝鮮人参を用ゆれども甚毒治せれ

本邦吉野人参を痞鞕に用ひて効あり故に
余は和参を用ひて朝鮮参を用ひされ
むかし昔も和漢ともに人参味ひ苦し
といふ本草綱目にも雷公桐君味ひ苦し
といへり日本になくとて

天暦帝の朝源順の和名抄に人参の和名
くまのゝいあり熊膽の味ひ苦き也り
なまめると名付るなり然るに今の朝
鮮人参は味ひ甘く製したるなり製
せずして甘しといふは偽なり用ゆれ

本邦の人参味く必製したるを本味と
そこなふ時は薬効なし且又補氣實虚
なといふはひがこといふべしそれハ氣を放
すれものなり何ぞても此抱あまらバ皆実

人参の味ひ
苦き地ふより試ハ
甘壊を経て
宜しきあり
御たれ心下痞鞕
に用ひて功
し然に後世
は甘味の人参
と用ひさる
なり

されバ人生るゝ時ハ氣あり死すれバ其
氣絶ゆ是天地自然にして形なく造化乃
司る所也人の積ハそのうちにあれバ毒と
形ある物なり故に積毒とハいふべし
積氣とハ言ふべからず人ハ火を爐にたとへ
積ハ爐のなり火氣ハ人の身にして積ハ爐なり
是火ハ形あり火氣ハ形なけれバとりてすつ故に
元氣補瀉乃事ハ醫者の身に及ぶことにあら
ざるとしるべし

一 或問曰毒藥にて病毒解して病を治
すれバ生を絶あまりて死するといふ人あり
いかん
答曰さる事あり是ハ扁鵲仲景も
やくにたゝぬなり余數十年疾醫の道
信じ毒の正を試て方を定め的中
するの術をはじめ心を盡し今をも人の
療治するに終身病人にも毒藥
と用るに大に瞑眩をまたハ之を毒の減する故

こまかにしるしたる説より以前とも毒をもてる
まゝく用ひられ候ふ合性して其ひ毫なる相
ふたりはの相あれ共半好しけれ人膜賍し
ても病毒あれハ又痰あるかと又痰さる
附他の醫者ふたのとゆりし此薬試用ひ
さらるゝあるりし故のこと醫者陰陽の理を
まて考へ後剤のやく臓腑傷あるけちゞく
此補薬にて云ゝん扶ゆ思ふハこまかしてあや
まてかりとて耳目鼻口の用又體化

動く事いふ事なく云かくてきくと
いふか未まえものたりまて經中ふ
あるれ臓腑乃あまるあれ共いふ年と
知より知り人きる理あしこまかれぬる
と古人陰陽の理とりて書記したるの多
し今の醫家こまか試みて考ゆるもの
毒薬にて臓腑を傷しむ共あるもの
出附古方ハ諸人恐るく半夏世夏河媚
書白に古方と称して肉他ふてハ大黄

乃ほと用ゆる事実しるしをもてみる時は
およのはまゐねす合点（がつてん）なれとも療治の妨（さまたげ）に
なる也人太の苦しくいふ事とみてくすれ
ばまた沈痾をなにもいはずして病毒の
尽るまで毒薬を用ひ一切補薬を用
ひざるもとをもやりて盛なく紀急し

一

或問曰古方家には産前産後ともに一切血
に拘（かかは）られざるといへるはいかん
答曰姙娠（にんしん）は婦人の常なり病なし又産

婦の業と用ゆる事なし血は造化乃
司るなり造化の司る人間の可知に混（まじ）ずる
事は聖人此を非に以て枚挙に与からずして
て療治とるなり薬にもいはるく漢の
古倉公専ら造化と人事に混じて論
せしよりも療医乃道絶えるなり夫五
穀の肉に変じの抽あり赤化と名付て血
といひ白化と名つけて水といひ皮膚（ひふ）に
出ると汗といふ是造化の化する事いふ

世にして絶えたるものなりんとかくまだなし
多くなる医者の診る所にあられぬるる今
太ぶ血あるハ血脱(たつ)と名づけ血を嘗ひ字と
嘗ふなどくいふものも大なるあやまりなり
天地自然の事なりハ何程出ることなれバ
拘はるまじし況ふ吐血して死する者を
見ず大吐血も病毒と咳(せき)く労病にするもの
あることを吐血衄血下血あるハ痔病を名それ
毒あるなりハたゞ唯毒業とまで二千病毒

をおぼえれハ血を自然と止まるなくハなり
あらぬるに出病況なる事なり況ふ吉凶
いふ人より吉益の産論産後金瘡と
て天下におこなれ家なることをも余ろ
なさぐはするも又婦人の妊娠するハ是人
事の常なれども人すなはちふあらんや
なりとこと流擾ハ世嗣(よつぎ)乃子なきれども丈夫
及ばれ是皆造化の自然なり人力の及ぶ不
ふあられ彼米子の方なるこれぞみまつくると

是後世派湯家の説なり已に扁鵲仲景ハ
たゞ毒薬をもって病毒を去ば病自治する
ゆへ胎毒も調ひ産も安し傷寒論金
匱要畧婦人の病といふものハ皆後人の攙
入なり用ゆべからず天地のごとく天地自然
なりゆへ産前も産後も療治ハなく
いらぬ事と知べし

一或問曰療醫を論ふに血に拘らずして療
治するといへり然るに仲景吐血衄血ハ

三黄瀉心湯芎帰膠艾湯等を用ひ給ふ
いかん
答曰吐血衄血を治すといふ事ハなし
心胸の間に毒ありて悸するときハ
吐血衄血ありといへども劇病にても治すゆへ
治す人ハ多くもいふ事の病症と兼るを三
黄瀉心湯にて治す又吐血衄血なくも心
胸の間に毒あれハ病人に用ひてハ薬効ある
し是をもって吐血衄血を治すと云薬ならず

さる事伏なるべし

一或問曰孔子も薑を撤ずして食し
たまひ曾皙は羊棗を食し給ふ是皆
薬物なれば毒なるべし
答曰薬も食もの薬味なる故それ〳〵の
らぬものなり夫薬は攻のことあり食は
養ふのことあり攻るものは是をきらひ拘ら
ぬも養ふものは是をきらひにあてがふたとへ
ば粥も薬力をたすくるものはきらひな搗

いれ強く用ゆる時はふみへこたへ地を去や
養生も薬に用ゆる時はきらふ人にも強
て用ゆべきことなり其の善悪病毒によるなら
合たるは吐深して病毒治されば祝をきらひ
乃柿を太く食せしむなり孔子
の薑曾皙羊棗皆好物にて食し給へは
害ひなくて毒にならぬものなり

一或問曰汗多亡陽とて汗多く出れば陽
を亡して死するといふはいかん

答曰なれバ汗ハ是造化の司にして
出来るものなり出る所を出ぬ所ハ人の
知る所にあらず然るに後世陰陽医者しく
論じられし様見え實事に合ぬなり
且諸病を治するに汗の多少に拘られ
病毒の在所を見定め其毒に方をつけて療
治するに的中する時ハ大に汗し或ハ吐血
或ハ衂血或ハ下血し種々の瞑眩を吐下
することあり又汗も血も穢物も出る

終りて止まり然して後ハ彼病毒去る
時ハ汗も血もその儘止りて速になる
ものなりよりて病毒ハ毒薬のあたるにしたがひ
く汗ある也又大に汗出れハ病毒大に減を
随ひ汗の多少出るハよれバなり其儘
後世の医麻黄にて汗を発しまた汗止され
ハ湯を亡して死するといひ且汗を止る
薬を用ひる様といふすあり大ならず誤なり
薬にて汗を発しぬ薬にて止る時ハ発へき毒

腹中に強ありて随に形をあらはせるものありし宮ま
たり事くとかけり久しく薬して南部鹿京に痛
乃筆を君に薬し腫満と患へ余を招き治を乞ふ則
之を診するに喘鳴迫息して煩渇し小便
無かりし因て大青龍湯を与ふる之を用ひて
四十日ばかりと経れども薬効なし是に南部
の門人大いに疑ひて薬方の当否を論ふ
余曰薬効の遅速を論ずることは方を能
的中せりとも数日なれども猶そうふ色あり

志れは薬を用ゆるに本病は的中
したる方なし故に猶太剤ありて用ゆべき後
二十日ばかり経て只今急変ありと告
来る故に見舞へば薬瞑眩劇しく悪寒戦
栗深くして汗出で今にも落命せんとす
家内さわぎあへり余曰これより先死はせう
ぬものなり然れども薬へ如くなる瞑眩
せされは治せぬものなりといひて又前剤
と用ひければ須臾後大に汗出で寒く止みす

六七度なりしを翌朝に至り腹皮緊満し
喘は治し小便快利となり其後十日ばかりして
常に瀉をかくのごとく大に汗の出る病人
に発汗を発されハ死するといふ麻黄湯を用
ゆれし湯を亡して死する事なく汗を
自然に止みて快寧しけるなり　漢書に曰
諺に云有病不治常得中医といへり是病気
の時医者を択まんとてとけバ中医にも
療治を頼みても同じことといふ事也中医

といふハ十に七を治するといふにて上手なる医より
は治法なくてもしれハ漢の時さへ病を治する
事かたかりしにまして今世にあたり病を治
するものかたし実にかといへバ規矩準縄
なき故陰陽の理をもつて教るもの歴代名
見識ばかりを今にいたりて医と云ふ人経
書誠に知るべき者なく従ふのなれ
なる門に入り親切して療治するなり
其の業なくて汗多く出れバ湯をもちく

死と論し指をしるにてあらん

一 或問曰生れし時より天性弱(よわ)き人あり又強き人あり是等は強き人を汗吐下して病の治する事もあれとも弱き人又老人などハ汗吐下ふ堪ずして死する事もいかん

答曰老人小児の壮年なる人より弱きハ天地の常なり病毒あれハ常と変じ能く人ふもとれてよ及死を皆腹中ふ毒あるなり人病ありこれ毒を取されバ皆治すべき事なり然らすハ素十二章目みるべし兄玉くし余数十年来老人小児の諸病を治しいまた業毒をあらされバ去て死する事ハ死しといふ事なし故て心ある後より余か門ふ入実事を学ぶ人ゑは偏よれとも無し加くき事なり

一 或問曰上工ハ治スニ未病ヲといふ事醫者ふも疾醫ふもある事なりいかん

答曰是疾醫の從ざらん今の陰陽醫にして
を治未病といふ語解しかねたる也相生相
剋の義をもて解をたとへば肺は金肝を
木肺充るときは金剋木とて肝木を剋して
肝を病しむると知りて肝のいまだ病
まざるさきに肺を瀉して肝を補ひ餘の病
ひも此肝に支ぬやうにとするなりといふ是に
みなはいふても術に家筆あることいさゝかなれ
其てうかべからず又疾醫の從なきといふは

都ての人病毒静りてあるときは毒なしと
おもふものなりこれを誤といふ必ず病毒の
ある人なりこれ病毒動く時は百病を発し
氣然病あるなりこれ静まりてある時病
毒を取去れば百病を発するなし是といはず
病さるを治するといふなれ後世の説にまよへるは
一或問曰先生常に扁鵲仲景も万病を一毒と
見るなりといふ独り史記傷寒論にみえざる
をいかん

答曰古昔扁鵲の薬方と漢乃仲景傷寒論を
よく晋乃叔和撰次しけるハ今の傷寒論
是なり彼撰次の内叔和已か言を加へたる所
仲景の本意ニ不合さる事多く見へけれ
ハここを書ニいたく　傷寒云々小柴胡湯主之中
風云々小柴胡湯主之經水適斷熱入血室云々小柴
胡湯主之有宿食云々小柴胡湯主之是とりて
見れハ傷寒も中風も瘀血宿食も皆小柴胡
湯にてよく治ると覺ゆれハ西方ニ廿一方

よく治せん胸脇苦滿の毒ニ小柴胡湯と
云て能く治せられハ此か乃諸病治とこそとすて
傷寒中風瘀血宿食等ハ後人の推入なる
事知るへし右皆は病因論なりさんとて
薬方の加減する道理あらんや是諸病
より一つの毒ありて其毒動て百病を
發すれなり故ニ万病より小柴胡湯ハ病ニ
發されハ小柴胡湯とあらん桂枝湯の病を
發すまてハ桂枝湯とあらん名を病ニ隨ふ

是を治も是仲景の万病を治するも一つ也
毒を目當にする事明らか也扁鵲曰病應見
于大表ニ是大表に在といふ大表にあらずして
内にある時は則胸中に一毒ある事知べし其
毒動きて万病を発す頭にありては頭痛
となし腹にありては腹痛となし足にあり
ては痿躄となる其の数千変万化あれども
数をいへば是扁鵲仲景も万病一毒と
見る事明らかなり彼傷寒金匱要略

の語にては万病治せんとて後人の推入あれ
ばなり扁鵲仲景の意万病一毒なるを
知りて推入を取舎されば治せざる病あるし病
の餘治せざるとして見れば扁鵲仲景の言
葉遠ざかりたるなり
一 或問曰古方とは仲景丸方を本として今世す
控涎丹滾痰丸七宝丸等を用るとして見れ
ば古方と云べくしていかん
答曰古方といふは世の唱ざりし方にて病の

能治ある法にて方に古今なし唯驗効
あるを用ゆべし然れども後世には効なき
方多くなく古昔には古昔の方を
多く用るなり然るを世上の人名つけて
古方と唱へ何ぞ方に古今の差別あらんや

一 或問曰仲景の治證(ちせう)とするに一病一方なり
今薬湯に丸散を兼用ゆるは古方とを
なるといはん

答曰是等(とある)はあらん傷寒論金匱にも大便
通せざる時は先調胃承氣湯をあたへ大便通
ずれば後證に随つて薬を用ひて功あり
古人なしといふべし且又名醫は病を能
治る人の名なり扁鵲乃名の朽ざるも能病
を治したるゆへなりされば扁鵲のなす
るところも病の能治する事なり時に用
ゆべし能病治する時は則古乃名醫なるに
適(かなふ)べきなり彼傷寒論金匱要略のごとき
闕文(けつぶん)もありて撰入もありて後歴代名家の

従ありて古人の言を然されハ是を書籍に記して
是を生涯術と得たりあれハさればなり今丸散
を兼用ゆるも病毒よく治すれバなり
疑ひあるへからん

一 或問曰毒といふ名目を立てゝ之を毒風寒
暑湿燥火或ハ飲食傷みて動くといふを是
も因あるを執りハ因と論せんといふならん
答曰此毒ハ何の毒にて何によつて動くや是
といふハ因と論ずるもしいふそのなり答いふ

而ハ毒ハ是毒何によつて生ずるや何より
よりて動くといふ事ハ毒ハ唯毒を而己を
視て療治をなすなり因ハ論ぜんといふ是
を晦ましに落て治療するを第一に而ハ
害とするにあるものハなり是を発る故の有ハ
いふにハあらず是を発る故とかぬもうからて論
し理を窮るに人力の及ふ所にあらずとして
後世の醫ハ是の理と窮むる事と而たらし
物主とも病と視定さるもの目の方と立てん

なんぞ病を見定て薬方を変る事あらん
是ロ小は病因といふて知ぶ志らさるなり
さまし人問試志るとも益なり因なし
たゞ理なり唯空論理窟にて道に害ある
ゆへ吾党にはいはざるなり

一 或問曰見ぶんにすへいふ故に肺癰腸癰
揃といふもの有り按ずれば毒も腹中にあり
くえんゐまれ也人臆見に紛らかいらん
答曰肺癰は肺に癰を生し腸癰は腸に

癰を生ずるといふは臆見なり皆腹中にあ
みて知ぬ事なり毒も腹中の事なれ
いふも是を仮と按ずる毒の所くあると仮にいふの
毒の形状見る也人経験ふあるれ故肺癰腸
癰も胸と肺の係りて胸痛臭氣甚しき
膿血を吐するを見て肺癰といひ腸にあつり
ふくく痛み膿血の下るをみて腸癰といふなは
されど害へあるまじ夫れとも療治の助にす
ねうすなり

一　或問曰周禮醫師職歳終則稽其醫事以制其食十全為上十失一次之十失二次之十失三次之十失四為下といへりさてこれハ古昔より醫を正すハ病人乃生死ふよく考ふるに醫者の生死を志らぬといふ事なかるへし

答曰周禮をいふも聖人の作といひとしたる人聖人の作といふとも數千年の昔ニ攙入ありかくしなんそ死生をまてるは

計りあらん聖人も死生命ありとのたまひ扁鵲も死せる人を生すあたハずといへとまてるまは生死みそ上工下工とさわぐるハ聖人のいふあらハ周禮へも次因經り上工ハ十に九を全ふすといへ死たる人ハ神農扁鵲みてくも助るよしなくいはんや又天命をぬを病瘉く治する事なり十人あり生らもといへれぬすなり

一　或問曰古方の療治ふよく病治する事ハ

迷なれども害ある事多しといふ人あり
いかん
答曰人このむ所と思ひ信仰しつゝ
随ふ時はことあしく死する人多きものなり又
行ふに於ては時は益ある事もあれば善
悪わかちがたきものなり是善悪と正さ
んと思ひて害する事ともて死る人し経き
病みては知れがたし世にいふ膈噎脹満癆
瘵病癲癇瘖啞ことに世によつて難治と

いふ病人を百人療治して余は七八十人を治と
云し後世の医は百人の中十人を治する
事あらば是をもて善悪とする人し病
難治とする時は何れ害なる事あらん
左ある病を治すれども害なる事なし
これは療治の中に死したる病人の
事なくはなるべく者にいふべく死生
を造化のなすところ医者の力に及ばず
小ある所古昔より十人が九人治する

とゝこといふ百人の中大抵十人斗死するハ
天命のなさる所なり是彼後世の薬方にて病
毒をおこらぬゆへ瞑眩せざるこれゆへ死して
も薬の害にあらざれバ世人ミな思ふ事也又死
なぬ時も病治して生るゝ時ハ世に神のごとく
思ひ薬の効にあらんと病根を取ると
して病の治をしる道理あらんや自然と病
毒静りて快気するなり是ゆへ故あり
僅なる事にてまたまて毒動きて夜く

病毒あるなり世に是を持病といふなれども
又持病といふ病あらんや是病を治するすべ
いざら事名つけるなり又庸医ハこれを毒
の形状を診て薬能あるべし病根を抜き
事ハ其ひ発するものなりこれを婦人ひ発
らぬ故にそれハ病根動く事ハ必薬病毒より
つるなりて瞑眩とこそ瞑眩と思ひて害を
知るとおりふし大形の治すり毒にしても
おほく薬ハ體を傷るものにあられハ病毒よ

あるものなり云説捜を瞑眩とれハ病毒滅しさりし招引健ふ形るものなりを試まて害けるすなれすとあるへし

一　或問曰方意を得さるを醫れあれといひのふ独りふ風邪ふて太ふ熱し讝(たハこと)言するものふ紫圓を用ひ又傷寒の人ふ紫圓芎黄散等を与へ何病にてとれ用ゆへしといひのふかくれごく病にても只紫圓を与へ給んを薬方乃的中となるやいかん

答曰扁鵲仲景の法を病のよく治する術なりとされ後世乃薬方ふても病よく治する時ハ則扁鵲仲景の法ふかなふ又扁鵲仲景の用ひられ方ふ合ハすとも効ある方を取へしかれハ孔子も先王乃法ふあらされハ國家ふ益あらすと我を言ふ志てらんや其の外ふ一概(がい)ふ法を守り或ハ書籍ふ泥(なず)む人ハ術を得る事あるハなきものなりさて馬服(ばふく)君の子の如くいたん彼不習風邪ふて太熱讝語をなは

ものに紫円を用ゆれハ吐瀉して治を然れ
ども湯薬に兼用さるれバ志るしを見る故ハ
歴代乃醫の論ニ邪気表にあると瀉く下
利乃薬を用ゆれハ薬気にしたがつて邪気裏
に入るといふ説あれど然れとも度々紫圓
を用ひて見るに一人も邪気の裏に入る事
なしかくの如き耳聴見の説ハ醫術に害あ
ることに害ある説に從んとならバ用ひざる門人に
病者のなり又備急圓乃人ニ与ふる事あり迄

も亦説に随ふて湯薬とともに丸散を兼用るにハ
志るし殊さらも諸国乃人京師にのぼる事
あたハさるものも薬つゝんとも人きたる事なし
故に丸散を與ふるに皆効あつて常にもいふごとく
万病ハたゞ一つの毒より生ずるものなれバ毒
丸散のごとく徐々に減し急に用ゆれハ終に病毒
尽く全快するなりかくのごとく功のあるハ
皆法に合するゆへ病よく治するとなりて法とすべし
一或問曰世にいふ所の疣瘤病抔とて五年十年

も療治して治せざる病大かた治して後り
震慄おこり大熱を発し譫言妄語するハいかん
答曰前療治しけるにより病毒を去るゆゑ
又大熱を発し譫言妄語するなりこれ病毒と
湯と去られハ再ひ発らぬこともあるなり

一或問曰世説の十日より二十日にきハまる大切なる
病人あるくハ即功見へ又尋常の病にくハ即功
なくときハいかん
答曰凡て毒の動く時ハ去やすきものなり

十日より二十日のうちに世説乃ごとく往々の病と
病毒十分に動てある故速に其効見へ又
尋常の病と病毒十分に動かざるゆへ去かたし
されバ世人傷寒時疫痢疾吐血なんどとて世よ
大切にいふ病人を却て速に全快するなり
建殊孫にてもそれへし其功効のあらはるゝもと
毒の動と動ざる故なりと知るへし

一門人問曰病を治するに方の主とす故に師の術ハ
方を主とすりし当術より先生の教れよく毒乃

在ところを見定て方を處し盡ども治しがたきは
也人は病人先生に治を求め先生は因て方を處する
ことに病治を先行といふなり
昔日道を知るといふことのミ

一　又問曰先生常に二三子を教て醫の學は
方のミといへり然れハ方の外に道をなすと
ならずんば斯れ道を知ると申すこと
常られハ方の外に道ありやいなや
答曰夫醫者ハ病を治するものなり病を治

するは方なるが故に醫の學ハ方のミといふ者なれ
ども道を知ざる人の方を用ゆるハ死地に陥ることく
勤れハ方ハ道によりて治勤を成ものなり故
病を得ることを知るところを以夫道ハ行の名也
なし人ハ往来する道のごとし人の往来すれも
道を知ざ往来ハ往来なれども自由ならずことを道を知
ざる道ハ世に成ごとし療治をなし道を知ると
知ざるとは大に違ひあることを道を知ざれは
先第一に生死ハ天の司にて人の司所にあらざれ

醫者は只療治救療にて万病唯一毒也
とさだめ一毒を去ん療治をなし生死に迷ふ時は
道よく達し方よく廻り病よく治れ共
病毒を去り終てふいつたる時ハ生死と
志らぬといふものに決定なり事なし 依て醫
乃学は方技をもて道を主ば何人かく自治
と得るのなりんとく生死乃事といふ一人
みても道と争はせしめんわけなり醫者乃
大事はこゝにあり能く考ふべし

一 又問曰道を行の名といふ事は治に合と聞く
方技活物のごとくになるといふ事得にくきや
きらん
答曰道と治とは道ハ方と治説明す事ふるとも
方之説明されハ是と知る事あるゆへを方之
を治さる人ハ同方と用ゆれども気に疑ひ起るなれ
形しとげる事あるゆへ治する人をはらに
此病毒の解をるといふ事を知てたとひ死をも
知に用ゆる方形しと氣に決定して慈と用ゆる

世人しかれども古を変せと病苦は日に治せる
なりと方ありといへる人は方にかゝれ方ありといへる
人を方と活す故に方あるがゆへ方と活す府は
自由自在なるより人を使ふごとし是を活物
のごとくするといふなり

一又問曰道と治る事治く学べきや
答曰云ふべし然れども余が發明せる事
といふべし又萬病唯一毒といふ事醫斷に
著しぬるを見よ二十年ばかり以前なり

然るに萬病の唯一毒なる事を自得しける
は漸く八九年このかたなりき是は呂氏
春秋に鬱毒の論あり扁鵲の傳に越人之
為方也不待切脈望色聽聲寫形言病之
所在とあり傷寒論に傷寒にも中風にも
宿食にも瘀血にも皆小柴胡湯を用てあり
これによりて萬病皆一毒といふ事を發明し
醫斷に記しぬれども是を郷と(?)して只書籍
によりて書記しぬれば世人業を無(?)れども

ゐふに疑ひ出し始つけゝる方と病の名をあけて
用ひらすあるべからず随ふ方と言ふるなりこれ方乃
かゝる中へに一毒乃術と称すあるべからずより
く古と称てゑんえん方意と探さぐり療治ふ稀習ひ自然乃
なく方と扱ひしよりこのこと病の治する事
格別すり病乃統治とるに随ふ一毒の術と
ゐふ証より之を疑ひなく統すなくへ知る道統
従来とるがなくしことゝ証ゐるといへり

医事或問下終

医事或問跋

兆岩之原者黎民惶畏及臻至
焦下万物也と国家安の書し
も法てしあらず我先称先流にし玉あり静
乃あと記君子を見へ含不まし彼あふ乱
さ見みすを世の因の国に為記
起しあめなにかすなく飛流すり妃

もし然のなる人をいふ事思ひあ
あやしきされと推し探りしれともはり
聖人乃んおして私なら孫も世に治し
かたあとりふ病をおそく在へ死さりと
見えし元急に藥生れて渡る渡て其の術
致すなりやおむしく妙なるさまあらく目耳
きん事とくなきに少えなれなる四鄰人おの

器を志さぬあまり程をにおひて門り
市ば於きを探さ執を異流乃人為あるぬ
さ流をいはんぬし然るに我業して世よ
うれ出来るせむものもの心志るぬ人毛るをに
流ときて以て怨み人も傳きを者や翁
元よりその傳頭を思ひれきにに人を
救ふの術我も少しも痛に苦あるいふを

せられんとする事さ流をも横さ流は思ひ
ゆゑ先いひ行しるあやまりわきまへんと後
世まで論し侍るなり其ものをとかしみ
遠かる半流と兎角を解さんとするものの
ほかの義は我を紀せしめ醫事或問と名
流布せしめ給へむ後學山賤志あらん者
あまたよく思ひまく人文字やふかきをは

小流里倍へと黨の二三子何事とて先
て尺語ひあれ世道乃術我得ん
堂書抄ふかき世よかし
明和戊子孫とし　男　猷之

明和六年己丑三月

平安書林

山本長兵衛
林　宗兵衛
田中市兵衛
發行